京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十九卷　第六號

大正十三年十二月一日發行

論叢

營業稅の不公平可能……法學博士　神戸正雄

獨占の本質……文學博士　高田保馬

道德統計論概說……法學博士　財部靜治

時論

在滿朝鮮人の現狀と其の救濟策……法學博士　末廣重雄

食糧問題と朝鮮の米作……法學博士　河田嗣郎

說苑

リカアドの價値論に就て……經濟學士　森耕二郎

雜錄

我國に於ける正貨の增減と金融繁閑との關係……經濟學士　小川福太郎

近世の農家經濟……經濟學博士　本庄榮治郎

附錄

本誌第十九卷總目錄

雜　錄

我國に於ける正貨の增減と金融繁閑との關係

小川福太郎

一

正貨は、現時の經濟社會に於て、國內にありては通貨增減の有力なる根源となり、外國に對しては貸借決濟の主要なる手段となつてゐるがために、其增減は金融の繁閑、一般物價の騰落、財政の施行に對して密接なる關係を有してゐる。就中、其增減が金融の繁閑に及ぼす影響は最も直接的であるが、特に我國の如く金貨が一般に流通せずして、多くは銀行の準備となる國に於ては、正貨の增減は銀行の融通力の大小に變化を來すことによつて金利の騰落に影響することが尠くないといふことは容易に考へ得られる。

固より、銀行の融通力は正貨の增減のみによつて變化するものではなく、銀行の資本金積立金其他の所有資金、正貨以外の貨幣による預金の多少によつても差を生ずる。更に銀行の現實の貸出高に至つては、必しも亦、其等の融通力の大小に比例するものではなく、信用擴張の可能に關する銀行の其時々の判斷如何によつても其增減の程度を異にする。それ故に正貨が增加したからといつて常に金融緩漫となり金利が下り、又正貨が減少したからといつて常に金融逼迫となり金利が上る、といふ樣に速斷することは出來ない。然らば我國に於ける正貨の增減は金融の繁閑に對して如何に影響するか、此問に答へるためには獨斷的主張を避けて、先づ金融の繁閑を表現する代表的材料を捉へ其實際の數字の增減を正貨の增減と比較することが必要であらう。

二

そこで、私は、明治三十六年以降大正十年に至る十九年間の、年々の全國銀行の預金及び貸

出高幷に全國平均割引日歩の三者を捉へて、其等の數字が正貨現在高と比べて、各々、其前年比較增減の方向を等くしてゐるか否かを見ることにしたのである。それに先ちて、是等の材料に就て若干の說明を加へねばならぬ。

一、我國の正貨現在高として從來、發表せられてゐるものは、政府及び日本銀行所有の正貨に限られてゐる。正貨の所有者としては其他にも、爲替銀行及び他の若干の銀行が存するであらうが、其金額は發表せられず從つて其精確なる數字を知ることが困難である。只だ、爲替銀行其他の銀行の所有するものは、政府及び日本銀行所有の合計額に比べて其金額が比較的僅少であり、政府及び日本銀行所有の正貨の增加する年は爲替銀行其他の銀行の所有正貨の增加する年であり、前者の減少する年は亦後者の減少する年であることを推定し得るから、正貨現在高を政府及び日本銀行所有のものに限つても、茲に目的とする增減比較研究の上に大なる變化を生じないであらうと思ふ。

二、全國銀行の預金及び貸出高は、「全國銀行預金貸出金高表」として年々の金融事項參考書に發表されてゐるところの、特種、普通、貯蓄の三種銀行の預金高及び貸出高を各々合計したるものを採用したのであるが、只だ、預金の中で、日本銀行に於ける政府預金なるものは殆んど大部分、政府所有の正貨其ものから成立つてゐるので、全國銀行預金高は特に政府所有の正貨高だけを控除したる殘額を以てした。（註）

（註）政府預金中、政府所有の正貨以外の國庫金が日本銀行の資金となることは現行の預金制度の下に於ては當然の事であるが、預金制度實施以前の委託金庫制度の下に於ても、明治二十七年六月法律第十二號を以て國庫金出納一時貸借法を定めて、日本銀行と國庫との間に一時貸借の通路を開いたので、事實上、國庫金は日本銀行の資金となつてゐたものと考へられる。從つて此の國庫金を金融界に關係なきものとして、全國銀行の預金中より控除する必要はないであらう。

尙、右の全國銀行預金及び貸出金高中には、各種銀行の在外支店に於ける預金及び貸出、外國爲替預金、外國爲替當座貸、利付爲替手形、外國爲替貸付金の如き、所謂「外國關係の預金及び貸出金」が包含せられてゐる。是等のものは殆んど何れも將來、正貨の增減に變化を來すべき分子であるが、

銀行の預金又は貸出金の中に現はれてゐる間は正貨と見る事が出來ないから、控除すべき必要がないと思ふ。

三、全國平均割引日歩は、金融事項參考書に載せられてゐるところの、全國要地に於ける平均割引日歩を集計して平均したものである。金利の高低を見るのに是を以てしたのは、一つは、比較すべき預金高及び貸出高が全國銀行の預金高及び貸出高であるがためであり、今一つは、割引日歩が金利の代表的のものであると考へられるからである。

さて、以上の各材料に就て、年々の數字の一ケ月平均數を算出し其平均數に依て前年比較增減の方向を見たいのであるが、遺憾ながら、正貨現在高は(觀察年數全部に亘つては)年末の數字しか知る事を得ないために、預金高及び貸出高も年末の數字を以てし、平均割引日歩は年末の數字を知ることを得ないから便宜上、各年十二月中の平均を以てした。卽ち左表の如くである。而して觀察の始年を明治三十六年としたのは、特別の理由あるわけではなく、是れ亦其れ以前の正貨現在高を知ることを得ないのに基くものである。

第一表 (金額千圓以下は四捨五入す)

年次＼項目	正貨年末現在高	全國銀行預金年末現在高	全國銀行貸出金年末現在高	全國平均割引日歩(十二月)
明治三十六年	一三九、一九四千円	七七一、七七六千円	一、〇四五、五一六千円	二・八四
三十七年	九六、九四五	八六四、二九〇	一、一六六、五四五	二・九九
三十八年	四七九、一七六	一、〇八三、三七〇	一、二九六、三九二	三・〇二
三十九年	四九四、七五七	一、五二七、八八一	一、五八七、一五三	二・六一
四十年	四四五、一九四	一、五八六、七四八	一、六五八、五五四	二・七九
四十一年	三九一、六〇九	一、三七一、二五五	一、五九四、八五一	二・九四
四十二年	四四五、九四四	一、五七八、四九四	一、六二〇、一二一	二・四八

年次＼項目	正貨年末現在高	全國銀行預金年末現在高	全國銀行貸出金年末現在高	全國平均割引日歩（十二月）
	千円	千円	千円	錢
明治四十三年	四七一、九九九	一、七二七、一二三	一、九〇九、四三〇	二・一九
四十四年	三六四、〇八六	一、七九六、六八六	二、二四四、三七五	二・三〇
大正元年	三五〇、七五〇	一、九五二、三一九	二、五二四、七六五	二・六三
二年	三七六、四九二	二、一三八、〇二五	二、七四八、七八三	二・七〇
三年	三四一、一一九	二、二七九、四五九	二、八二六、一九〇	二・七五
四年	五一六、〇八三	二、六五七、五九五	二、九八八、一四六	二・四三
五年	七一四、四四五	三、五七一、三九三	三、八四〇、五七四	二・二五
六年	一、一〇四、八三八	五、三五三、六二五	五、一三二、九六八	二・一六
七年	一、五八七、六七一	七、三五五、二一〇	七、四一六、一〇八	二・一九
八年	二、〇四五、一四九	八、八三二、二九五	九、八八一、五九八	二・六一
九年	二、一七八、六二六	八、九四四、九三七	九、七三九、六六七	三・一三
十年	二、〇八〇、四四五	九、六二四、一八二	一〇、五四七、四一八	二・九〇

三

今、前表の各欄の毎年の數字を其前年の數字と比較して其増加又は減少を記號にて表し、尚序に次の如く、預金に對する貸出金の割合を算出して、其毎年の數字を前年の數字と比較して其増加又は減少を記號にて表して見ると第二表の如き結果となる。

預金に對する貸出金の割合

年次	割合
36	1. 355倍
37	1. 350
38	1. 197
39	1. 039
40	1. 045
41	1. 163
42	1. 026
43	1. 106
44	1. 249
1	1. 293
2	1. 286
3	1. 240
4	1. 124
5	1. 075
6	0. 959
7	1. 008
8	1. 119
9	1. 089
10	1. 096

第二表（十八増　△八減）

年次＼項目	正貨	預金	貸出金	預金ニ對スル貸出金ノ割合	割引日歩
三十七年	△	＋	＋	△	＋
三十八年	＋	＋	＋	△	＋
三十九年	＋	＋	＋	△	△
四十年	△	＋	＋	＋	＋
四十一年	△	△	△	＋	＋
四十二年	＋	＋	＋	△	△
四十三年	＋	＋	＋	＋	△
四十四年	△	＋	＋	＋	＋
元年	△	＋	＋	＋	＋
二年	＋	＋	＋	△	＋
三年	△	＋	＋	△	＋
四年	＋	＋	＋	△	△
五年	＋	＋	＋	△	△
六年	＋	＋	＋	△	△
七年	＋	＋	＋	＋	＋
八年	＋	＋	＋	＋	＋
九年	＋	△	△	△	＋
十年	△	＋	＋	＋	△

此第二表に依て比較研究をなすに値する各欄の組合せは

(一)正貨現在高と預金高
(二)正貨現在高と貸出金高
(三)正貨現在高と預金高と貸出金高
(四)正貨現在高と預金に對する貸出金高
(五)預金に對する貸出金高と割引日歩
(六)正貨現在高と割引日歩
(七)正貨現在高と預金に對する貸出金高と割引日歩

であらう。其他の組合せ例へば預金高と割引日歩、貸出金高と割引日歩の如きは相互の關係が偏頗であるから茲に問題とせない。それで右の組合せ順に從つて比較して行く。

(一)正貨現在高と預金高とを比較すると

正貨増加し（預金増加せる年　十一ヶ年／預金減少せる年　ナシ）
正貨減少し（預金増加せる年　六ヶ年／預金減少せる年　一ヶ年）

であつて、正貨が前年よりも増加せる年は何れも、預金が前年よりも増加してゐる。次に正貨が前年よりも減少せる年（七ヶ年）の中では、預金が前年よりも増加してゐる年が多く（六ヶ年）

預金が前年よりも減少してゐる年は少い。

（二）正貨現在高と貸出金高とを比較すると、

正貨增加し（貸出金增加せる年　十ヶ年／貸出金減少せる年　一ヶ年）

正貨減少し（貸出金增加せる年　六ヶ年／貸出金減少せる年　一ヶ年）

であつて、正貨が前年よりも增加せる年（十一ヶ年）の中では、貸出金が前年よりも增加してゐる年が多く（十ヶ年）其減少してゐる年は少く、正貨が前年よりも減少してゐる年（七ヶ年）の中では、貸出金が前年よりも增加してゐる年が多く（六ヶ年）其減少してゐる年は少い。全體として（一）の場合と殆んど同樣の結果になつてゐる。

（三）正貨現在高と預金高と貸出金高との三者を一緒に組合せて比較しても、（一）及び（二）と殆んど同樣の結果となる。即ち次の如くである。（括孤內は其れに該當せる年である）

正貨增加し（預金、貸出金共に增加せる年　十ヶ年（明治三八年、三九年、四二年、四三年、大正二年）／預金增加し貸出金減少せる年　一ヶ年（四年、五年、六年、七年、八年、大正九年））

正貨減少し（預金、貸出金共に增加せる年　六ヶ年（明治三七年、四〇年、四四年、大正元年、三年）／預金、貸出金共に減少せる年　一ヶ年（明治四一年））

其他の組合せとなる年なし、

以上、（一）（二）（三）の比較によつて、正貨が前年よりも增加してゐる年の大部分は、預金、貸出金共に前年よりも增加し、正貨が前年より減少してゐる年の大部分も亦、預金、貸出金共に前年よりも增加してゐるといふ結果となつた。かゝる結果となるのは、恐らく、全國銀行の預金及び貸出金が年々增加して行く大勢にあるためであらう。然し此結果では、正貨が前年に比べて增加した年と其減少した年との間に區別が立たない。そこで一歩を進めて、正貨現在高と預金に對する貸出金の割合とを比較して觀る。

（四）正貨現在高と預金に對する貸出金の割合とを比較すると次の如くになる。

正貨增加し（預金に對する貸出金の割合減少せる年　八ヶ年（明治三八年、三九年、四二年、大正二年、四年）／預金に對する貸出金の割合增加せる年　三ヶ年（五年、六年、九年、明治四三年、大正七年、八年））

正貨減少し
預金に對する貸出金の割合增加せる年（明治四〇年、四一年、四四年、大正元年）五ヶ年
預金に對する貸出金の割合減少せる年（明治三七年、大正三年）二ヶ年

是れで觀ると、正貨が前年よりも增加せる年（十一ヶ年）の中で、預金に對する貸出金の割合が前年よりも增加してゐる年即ち貸出金の方が預金よりも增加率が大である年は少くて（三ヶ年）、預金に對する貸出金の割合が前年よりも減少してゐる年即ち預金の方が貸出金よりも增加率が大である年が寧ろ多い（八ヶ年）。次に、正貨が前年よりも減少してゐる年（七ヶ年）の中では、預金に對する貸出金の割合が前年よりも減少してゐる年即ち貸出金の方が預金よりも增加率が小である年は少くて（二ヶ年）、預金に對する貸出金の割合が前年よりも增加してゐる年即ち貸出金の方が預金よりも增加率が大である年が多い（五ヶ年）。

右二つの傾向の中の一つ即ち正貨が前年よりも增加した年には預金の方が貸出金よりも增加率が大であることが多いといふことは、正貨が前年よりも增加した年には、金融が前年よりも比較的緩漫になることが多いことを示し、他の一つの傾向即ち正貨が前年よりも減少した年には貸出金の方が預金よりも增加率が大であることが多いといふことは、正貨が前年よりも減少した年には、金融が前年よりも比較的逼迫になることが多いことを示してゐるものではなからうか、と一應考へられる、然し尙、此の後の場合即ち正貨が前年よりも減少した年には貸出金の方が預金よりも相對的に增加して金融が比較的逼迫になることが多いといふ場合に、此の貸出の相對的增加が正貨の減少に基かずして、寧ろ銀行の資本金、積立金其他の所有資金を基礎として生じたものではないだらうか、從つてそういふ時には必しも金融逼迫とならないかも知れないとの疑問を生ずる。それ故に更に今一歩を進めて金利がどうなつてゐるかを見る必要が起つて來る。

（五）預金に對する貸出金の割合と平均割引日歩、先づ此兩者が如何なる組合せになつてゐる

かを觀ると次の如くである。

預金に對する貸出金の割合增加し（割引日步增加せる年　六ヶ年／割引日步減少せる年　二ヶ年）

預金に對する貸出金の割合減少し（割引日步增加せる年　五ヶ年／割引日步減少せる年　五ヶ年）

是に由つて觀ると、預金に對する貸出金の割合が前年よりも增加した年（八ヶ年）の中で、割引日步が前年よりも高くなつてゐる年の方が多く（六ヶ年）、割引日步が前年よりも安くなつてゐる年は少い（二ヶ年）。そうすると、前にいつたところの、正貨が減少しても銀行の資本金、積立金其他の所有資金が放出せられて金融を逼迫ならしめぬかも知れぬとの疑問は幾分解決せられた觀があり、そういふことに成ることが少い（或はそういふ資金が放出せられても金融を餘り緩漫にせない）といふことになる樣である。從つて又正貨の增減が割引日步の高低と密接なる關係を有してゐることが推知し得られる。

（六）正貨現在高と平均割引日步、そこで序に正貨現在高の增減と平均割引日步の高低とを比較して觀ると

正貨增加し（割引日步減少せる年　六ヶ年／割引日步增加せる年　五ヶ年）

正貨減少し（割引日步增加せる年　六ヶ年／割引日步減少せる年　一ヶ年）

であつて、正貨が前年よりも增加してゐる年（十一ヶ年）の中で、割引日步が前年よりも安くなつてゐる年は六ヶ年で、前年よりも寧ろ高くなつてゐる年も五ヶ年なる。然し、正貨が前年よりも減少してゐる年（七ヶ年）の中では、割引日步が前年よりも高くなつてゐる年は六ヶ年で、前年よりも安くなつてゐる年は一ヶ年に過ぎない。此結果と（五）の結果とを考へ合はすと、正貨の增減が割引日步に直接影響するとはいへなくても、間接的に密接なる關係があり、就中正貨の減少した場合に其影響が著しい樣に思はれる。

（七）正貨現在高と預金に對する貸出金の割合と平均割引日步。最後に此三者を組合せて三者が如何に關聯してゐるかを觀る。

正貨增加し

預金に對する貸出金の割合減少し割引日歩減少せる年　五ヶ年
（明治三九年、四二年、大正四年、五年、六年）

預金に對する貸出金の割合減少し割引日歩增加せる年　三ヶ年
（明治三八年、大正二年、九年）

預金に對する貸出金の割合增加し割引日歩增加せる年　二ヶ年
（大正七年、八年）

預金に對する貸出金の割合增加し割引日歩減少せる年　一ヶ年
（明治四十三年）

正貨減少し

預金に對する貸出金の割合增加し割引日歩增加せる年　四ヶ年
（明治四〇年、四一年、四四年、大正元年）

預金に對する貸出金の割合增加し割引日歩減少せる年　一ヶ年
（大正十年）

預金に對する貸出金の割合減少し割引日歩增加せる年　二ヶ年
（明治三七年、大正三年）

預金に對する貸出金の割合減少し割引日歩減少せる年　なし

是れで觀ると、正貨が前年よりも增加した年（十一ヶ年）の中では、貸出金が預金に對して前年よりも相對的減少をなし割引日歩も前年よりは安くなつてゐる年が最も多く（五ヶ年）、正貨が前年よりも減少した年（七ヶ年）の中では、貸出金が預金に對して前年よりも相對的增加をなし割引日歩も前年よりは高くなつてゐる年が最も多い（四ヶ年）。此の結果は先に觀察し來つた結果の主要なるものと大體、一致するものであつて、結局、正貨が前年よりも增加する年は金融が前年よりも緩漫となることが多く、正貨が前年よりも減少する年は金融が前年よりも逼迫になることが多いことを語るものである。

四

以上の研究に由つて得たる結果を更に總括すれば、我國に於ては、銀行の預金及び貸出金が年々增加して行く大勢にあるも、正貨が前年よりも增加する年は、預金の方が貸出金よりも相對的增加をなし、前年よりも金融を緩漫ならしめ割引日歩を引下げるに至ることが多く、反對に正貨が前年よりも減少する年は、貸出金の方が預金よりも相對的增加をなし、而も其際正貨以外の銀行の所有資金の放出によつて金融を緩和せしむる力弱くして、正貨減が有力に金融の逼迫を來し前年よりも割引日歩を引上げるに至ることが多いといひ得る樣な狀態を現してゐる。

此研究は、各材料の一年の特定時期に於ける

數字に基いて其前年比較增減を根據としたるものであるから、時々刻々變化を來すところの敏感なる金融界に及ぼす正貨增減の影響を描寫して、此增減が如何に金融界に影響を與へて行くか、或は大都市と其他の地方とに依て其影響を異にするか、といふ風に細微に亘つて遺憾なしといふ樣には固より出來てゐない。それがためには更に各材料に就て少くとも一年の各月に於ける數字を基礎とすると共に、正貨其ものゝ內容幷に其增減の原因をも考慮して研究せねばならぬ。又各材料の數字が一年の特定時期に於けるものに限られてゐるために、其季節的特徵を帶びてゐるものがあるであらうが、大體に於て、正貨の增減が如何に我國の金融界と密接なる關係を有し、是れに影響する事が多いかを推知せしむるに足ることを、明かにするを得たと思ふ。然りとせば、金產額の極めて少く正貨の增減が殆んど專ら國際貸借に基く收支關係に支配されてゐる我國に於て、正貨の增減が常に喧しい論議を惹起するに至る有力なる一理由が茲に存することが知られるであらう。